

たより

『美紗の会』

ニュース

第六号

平成五年五月十二日

発行者
「美紗の会」事務局
☎ 03-3441-2726

第二回北米公演

成功裡に行われる

日本芸能紹介に貴重な貢献

昨年に続き会主の今年の海外公演も好評のうちスタートした。四月一日、ニューヨーク・ジャパソサエティの公演は大きな反響を呼びニューヨークタイムズでも取り上げられた。

アマースト、マンハッタンビル両大学では学生との交流で会主も色々と感じるところがあった。この貴重な体験が今後の活動で生かされ伝統芸能の育成に大きく貢献するだろう。

春のアメリカ演奏をふり返って

会主・橋場はつえ

一度目の北米の旅は、ニ

ューヨークのジャパソサエティ劇場から始まった。前日のリハーサルでは、言葉の障害と感覚のずれで、照明がうまく行かず騒動だったが、四月一日の当日は、打って変わ

って幻想的な「地唄舞」のひとときだった。数日前から入場券売り切れの盛況であったにもかかわらず場内は、水を打ったような漆黒の静寂に包まれ、心地好い緊張感の中で、日本美の極致を表現できたよ

うに思う。

ニューヨークタイムズ、雑誌NYの批評にも、その評価があったことは、舞を支える演奏者として何よりも嬉しかった。

そしてその余韻に浸る間もなく三日には、ニュージャージー在住の高橋さんのご手配でマンハッタンビルカレッジのホールでコンサートを開いた。日米の学生、一般の聴衆の和やかな雰囲気の中で、伝統芸能が日米文化交流の懸け

四月一日ニューヨーク・

ジャパソサエティ

平成五年四月一日、新装なったジャパソサエティ（ニューヨーク市）のリラ・アチソン・ウォレス・オーディトリウムに会主の三昧の音と唄が朗々と響き渡った。セゾングループ後援の閑崎流地唄舞公演である。

閑崎ひで女
閑崎清女

橋の役目を果たしているという喜びを感じたものだった。私にとって何よりの贈物は、演奏の後の質疑応答だった。思いがけない質問から、自らの姿勢を問いただすことがしばしばあった。

日本では感じられない心の交流はアマースト大学のジョン・ソルト教授の招聘で再度実現した同学での演奏。源氏物語のひとつ、でもあった。「葵の上」「夕顔」の後の「唄と曲との関係は？」という質問には、私が最も説明したいことであつたが、音と唄との「間」の大切さ、不即不離、序破急、様式化された中

地方 三弦・唄 西松布味
胡弓・唄 小原清歌
尺八 宮崎青歌
演奏 萬才・ぐち・
反魂香・ゆき

会場を埋め尽した聴衆の殆んどが米国人で、彼等の日本文化乃至日本に対する関心の大きさに改めて驚く。

公演は大成功。米国人の聴衆はフアンタスティック、インプレスティブ、インクレディブルなどの言葉で感激を語り合い、米人に交じり足を運んだ日本人のお年寄りも久し振りに本物の邦楽に接することが出来たと余韻を楽しんでいた。

四月五日付のニューヨークタイムズはこの公演の記事に

半頁を割き、会主をはじめとする地方（じかた）に「ファイン・ミュージシャンズ」と賛辞を惜しまなかった。

四月三日マンハッタンビルカレッジ

二日後の四月三日には聖心女学院と姉妹校の関係にあるマンハッタンビル・カレッジのアラウンソンホール・リトルシアターで会主のリサイタルが開催された。

演目は『夕暮れ』『春風さん』『夜桜』『きりぎりす』。地唄舞の『黒髪』と地唄『夕顔』と『葵の上』。

『黒髪』では昨年のアマースト公演に共演してもらったプリンストン在住の閑崎純女（田野純子）さんに舞をつけていた。

この公演も大成功。会主と閑崎純女さんの熱演に小さな劇場を満員にした百二十人の聴衆は万雷の拍手を送った。

ここでは、聴衆の大多数が特に知日家や日本ophilとは思えない一般の米国人があつたにも拘らず、演奏の後四十分にも及んだ質疑応答にも殆んど席を立つ人がいなかった程で、その熱心に驚かされた。

本公演開催に「尽力頂いたマンハッタンビル・カレッジ文学部ヴァージニア・スコード助教授に心から感謝したい。（在ニューヨーク）

高橋 剛 記

五月十八日

アサヒホールで演奏

北米公演の疲れも取れない、帰国の翌週四月十六日には会主は日立シンビックセンターで恒例となった第三回「花の季」に出演。何時ものように会主の芸を慕う熱心な愛好者が集う。公演を終えての懇談では北米演奏の土産話に花が咲き、会主の芸の広がりや寄せられる期待もいよいよ大きくなる。

これに先立つ三月七日、伊香保「さつき亭」では山村千代恵師の舞と共に会主の三弦と唄を聴く、上方舞と唄を主題とした「邦楽と会席の夕べ」が持たれた。会主は北米公演の準備の間を割き、「さつき亭」での邦楽愛好者との貴重な時間を楽しみに参加。

世間の不況風のせいでも余裕が無くなったのか、伊香保では、これまでに比べ参加者が減ったのを会主も心配。

邦楽育成に熱意を見せる「さつき亭」女将のためにも、次回は是非東京からも聴きに来て貰えるファンを待望する会主である。

次回公演は、五月十八日浜離宮アサヒホールでの「朝日アリオンレクチャーコンサート」朝日新聞の「折々のうた」の選者として知られ、また邦楽の優れた理解者で、また鋭い評論家でもある大岡信氏との舞台上で会主がどんな芸を見せるか、大いに期待される。

『美紗の会』会員訪問(一)

千駄木教室 山根久子さん

何時も笑顔を忘れないように

千駄木教室。白壁に木の床、真中に敷かれたオレンジ色のカーペットに師匠と対座する弟子。ぴんと張りつめ空気。気のせいか糸の音も湧えて聞こえる。

が、三味線を置いた師弟の間には直ぐに暖かい会話が。山根さん、夜勤で疲れたでしょう。

「そうなんです。昨夜は患者さんにいろいろあって、申し送りの終わったのが今朝の十時すぎ。それからついさつき五時まで寝ていたんで、まだ頭が起きてなくて。上手く出来ずに御免なさい。今度までにはしっかり練習しておきます。」

「そんなことないわよ。貴女は忙しいのに良く練習しているって何時も感心しているの……」

山根さんは御茶ノ水『杏雲堂病院』の看護婦さん。『杏雲堂』は明治七年、東京帝國大学によって創立された由緒ある病院で、文化勲章を受賞した医師を一人も出している。今日は稽古の合間をみて山根さんにインタビュー。

「山根さんはそこで婦長さんをしてるのですか?」「いいえ、とんでもない。」

古しようという気になったんですか?」「何時もニコニコしていたいからなんです。余り忙しいとただ休んだだけでは気が晴れないんです。勤務のこと、患者さんのことが年中頭から離れないとどうしても緊張が続いて内に籠り、顔が酸っぱくなってしまふ。それで患者さんに申し訳ないですよ。患者さんに疲れた顔を見せると、患者さんも気が晴れず悪循環になってしまふんです。ところが好きなことには、幾ら忙しくてもそれが出来るという楽しみがあるんですよ。で、自然に顔も柔らかくなり、ニコニコするんです。時には小声で唄を口ずさんだりして、よく人からも何時も幸せそうねと言われますけれど。私も若い人に、心の休まる趣味をお持ちなさい、と言って上げるんです。」

しかし明るく話す山根さんも、これまでの人生は決して平穩無事なものではなかった。鹿児島島の田舎の地主の家に、九人兄妹の末っ子として生まれながら、長ずるに従って苦勞を重ね、一時は過勞のために失明させられたことがあるという。

三年ほど前、ふとしたことから、昔やったことのある三味線を取り出し、生活の潤いを取り戻そうとしたのがきっかけ。三味線の修理を頼んだ菊音さんが縁結びの神様とな

り、師匠との御縁ができる。稽古を始めて二年少々、昔取った杵柄か、好きこそもの上手なれか、いや両方が合わさってのことだろう、忙しい日々の合間を縫うて稽古なのに師匠も驚くほどの上達振り。

でも、本当は技量より、師匠の言われる、心で唄い弾く山根さんの優しい音色が人を魅了するのだろう。「最後に…一番好きな曲は?」

「そう『有明』かな。でも私は『芝で生れて』のような威勢の良い唄も好きなんです。若々しく純粹な山根さんの答えである。(鹿児島県出身)(文責・齋藤)

このインタビューは一月二十六日に行いましたが、紙面の都合で掲載が遅れました。お詫びします。

『会員消息』

『美紗の会』の創設会員(本紙三号参照)である嘉本範男氏。北海道・神戸・大阪と全国を股に掛ける活躍で東京を離れ、稽古も休んでいたが、この度東京に戻ることにになり、五月から赤坂教室に復帰。また懐かしい美声と飄々としたお人柄で皆を楽しませてくれるだろう。期待しています。

『会員からのたより』

帰省する日に『たより』を頂戴し、新幹線の中で先生の活躍や皆様の近況など楽しく読ませて頂きました。

三月十七日無事二人目の男子出産しました。二六九五グラムと小粒ですが声の大きな元気な子です。「おひきぞめ」や「浴衣ざらい」のような長い時間は無理ですが、先生の演奏会なら命の洗濯になりま

すので是非お知らせ下さい。髪より乱している現実を忘れて、しばし美しくも哀しい男女の愛の世界に酔い痴れたんです。主婦業という特に限定された状況では先生からの『たより』は、再び稽古を始めるまでの細いながらも、な

べてが慌しく、娘はあつという間に出て行き、礼拝堂のパーズンロードを私と腕を組んで歩いてた。

すべてがあつたらかんとして、明るくて。これで良かったのかも知れない。

ひとり本棚に残された吉川の本を開いてみても、時代の差を感じ、今では却って涙を頼みます。という本を密かに買った。

その時になつたら、嫁ぎ行く娘を送る時の父親の心情を書いたこの本と、わが子を育てた時の指針にした、脳の話(一時実利彦著)を黙って渡す積りでいた。

前の夜も、当日の朝もす

んとか繋がっている可能性のようなものですね。先生を初め編集して下さっている皆様に心からお礼申し上げますと共に、今後の益々の活躍をお祈り申し上げます。(佐々田 和代)

皆様お変わりございませんか? オーストラリア在住も五ヶ月が過ぎましたが未だ英会話は上達しておらず、あと半年居ることに決め、帰国は来年に

なりそうです。帰国次第連絡させて頂き、またお世話になる積りでおります。どうぞ皆様によりよくお伝え下さいませ。(中西 けい子)

皆さんからのおたよりお待ちします。(編集子)

『編集雑記』

私ごとで恐縮だが娘が嫁いで行った。書物や芝居で見聞きするように、出て行く前に改まって挨拶でもされたらどうしようかというのが問題でもあった。

昨年暮、赤坂教室の皆と奥多摩に行つたとき、吉川英治記念館で彼の著『どうか娘を頼みます』という本を密かに買った。

師匠が東海岸で三筋の糸に乗せ源氏物語を唄い、国際性豊かな学生がこれに感動する時代である。

文化の交流、国際化と共に、日本の家族社会も変わって行くのだろう。(た)